
アップルジュース

天谷 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アップルジューズ

【Nコード】

N5805M

【作者名】

天谷 翔

【あらすじ】

一人の彼女と出会い、動き始めた僕的时间

（前書き）

初めて投稿します。

ある曲を聴いて触発され、一部歌詞を引用させていただきました。

拙い文章ですが宜しくお願いします。

「ああ、今日もやってしまった」
なにがって？

簡単に言えば僕は使えないダメ社員ってことだ。どうやら仕事のミスが多いらしい。なんでらしいのか？

それは口下手な所と人付き合いの下手さによる。

なにかというと誰がしかのポカが僕のミスになるからだ。

それを反論しようとするけどどうにも要領が悪く「あの」「その」と口ごもってしまい、そのまま流されてしまう。

上司から「もういい」と言われたのは数知れずだ。

同僚からは程のいいミス処理班としか思われていない。

地元の大学を出て東京へ来た時は、そりや希望に胸を膨らませて、まるで何もかもこの先バラ色の人生が待っていると思っていたものだ。

だけどそんな思いも一年二年とたてば、それはただの勘違いだと嫌でも気づかされた。

ダメなやつはいつまでたってもダメなやつ。そんなレッテルは何枚でも貼られてしまう。

そう、思えば学生時代から要領の悪さは天下一品だと今になってみればわかる。それが通じていたのは幼友達や家族がいたから救われたのだろう。

今となつてはもう一人で生きていかななくてはならない。

ただそれにもどうやら耐えきれなくなっていることに気がついている自分がいる。

地元に戻るといふ選択肢もあると思うが、今の僕にはそんな簡単な選択肢すら見えてなかった。

ただ【生きていたくない】というその思考に縛られていた。
そして今日でその思考すら止めてしまおうと決めていた。

そう決めてしまうと自然と楽に周りが見渡せていることに気がつく。
人間ていうのは不思議なもんだと苦笑した。自分のことなのにね。
帰り道、繁華街を通り駅へと向かっていた。

いつもなら鬱陶しく思う人や物が、なんだか今はいとおしくも感じた。

「今日で見納めか」ふと独り言呟いた。

その時、少し向こうから歌声が聴こえた。

『歩く歩幅が大きくなるに連れて 夢から遠ざかっていく』

聴こえてきた歌詞は今の僕のことを歌っているのかと思えた。

もう少し歩くと歌声の主が閉店した店のシャッターを背にアコースティックギターを持って声を張り上げて歌っていた。

歳は僕より二つは下くらいに見えた女の子だった。

綺麗なロングヘアーに上はパーカーでジーンズを履いてスニーカー姿。

彼女の前にはギターケースが置いているが、なぜか蓋は開いていなかった。

いつもの僕なら立ち止まることはないが、最後ということでもじゃないことをするのも良いかとギターケースの前に座った。

彼女は僕に気がついたみたいだ。だって目を見開いてびっくりしたように一瞬歌が止まったんだもの。

僕はその姿に微笑んでしまった。

笑った自分に驚いた。

彼女は顔を赤らめたけど、すぐに続きを歌い始めた。

『深い闇に閉ざされ 怯えきった自分らしさも連れてくよ』

なんだこれ、本当に僕のこと？
そんなことあるわけないんだけど。

ほんとならすぐに立ち去ろうと思ったんだけど、彼女の歌声と歌詞に釘付けになってしまった。

そう、まるで足に杭が打ち込まれた様に身体が動かない。

そしてそのまま最後まで聴いてしまった。

歌い終わると彼女はお辞儀をした。客は僕しかないけど。

歌ってた彼女は寂しげな表情でいたのだけれど、打って変わって興奮したように僕の手を取った。

「初めてのお客様です」

その後も僕の手を握りながら何度もありがとうございますと連発した。

「今日誰も立ち止まってくれなかったら止めようと思ってたんです」
彼女はまた表情を変え目に涙を浮かべて号泣した。

その後は彼女と少し話をした。

もう一年もここで歌っているんだそうだ。だけど誰一人立ち止まることはなかったのだそうだ。

僕も二年ここを通っているが彼女を認識したことはなかった。
それを素直に話してしまった時に失敗したことに気がついた。

「そうですね・・・」

また伏し目がちになってしまった。

「でも大丈夫です。今日はあなたが立ち止まってくれたから」

そう強がり言っていたがまた目には涙が溜まっていた。

僕は慌てて何かこの状況を打開できないかと思い周りを見渡した。
すると飲み物の自販機を発見し彼女にプレゼントすることにした。
缶コーヒを二本買い彼女に一つ手渡した。

ありがとうございますと受け取り一口飲むと彼女は顔をしかめた。

「どうしたの？」

「私コーヒー飲めないんです。でも頂き物なので飲みます」

彼女はまさに四苦八苦という言葉が似合うというか、似合い過ぎるくらいなのに、全て飲み干した。

「ごっごちそうさまでした」

軽く青ざめていたのが妙に可愛く見えた。

僕は悪いことしたかなと思ひ彼女の好む物を聞いた。そうしたら返答がアップルジュースと返ってきた。

それを言っただ後に彼女は

「あつ、いえ大丈夫です」といったがさっきの自販機にアップルジュースがあつたのでお詫びに渡した。

にこやかに受け取りすぐに飲み干した。
今度はご満悦のようだ。

「あつ、お金払います」

「いいよ。歌聴かせてもらったからさ」

そうするとまた僕の手を取り、「ありがとございます」と言った。
「まだ時間がありますか？良ければもう少し聴いてもらえると嬉しいです」

僕は時計を見た。

ただその行動が意味を持たないことを知っている。

だつて僕の最後の日であるのだから。

「うん」と言つて地べたに座った。

彼女は嬉しそうにそのままさっきの歌を含めて四曲歌い続けた。

その歌声と歌詞を聴いていると不思議と頭の中にある【生きていたくない】という思考は薄れていた。

それよりも【ずっと彼女の歌を聴いていた】という欲求が心を支配していた。

僕は歌に心が左右される人間ではないと決めつけていたのかもしれない。

そう、僕は自分という人間を決めつけていたんだろう。僕はダメだとか僕はいらぬとか。

僕が僕を諦めていた。

彼女の歌が僕を解き放ってくれたようだった。

「私ここで毎日歌っています。また来てください」

僕は彼女に言われなくてもそのつもりだった。

それから一ヶ月間、毎日彼女の好きなアップルジュースを持って歌を聴きに行った。

やっぱり立ち止まるのは僕だけだけれど。それでも彼女は嬉しそうに高らかと歌った。

それからというものの僕は仕事場でも少しずつ変わっていった。

伝えたいことをちゃんと言い、ミスもなくなった。

諦めなければ人間は変わるんだ。

それを気づかせてくれた彼女にありがとうと伝えよう。

僕はいつものアップルジュースを持って彼女のいる場所へと足早に向かった。

だけど今日はそこに彼女はいなかった。

雨の降る日もいつでもいた彼女なのに。

それからまた一週間。

彼女がここに来ることはなかった。

それでも僕は通い続けた。さらに二週間が立ち諦めかけたある日そこに見知らぬ女性が立っていた。

「あの子の歌を聴きに来てくれた方ですか？」

不意に女性から声をかけられた。

あの子という言葉に僕はピンときて返答する。

「そうですか」

女性は顔をくもらせて言った。

「あの子は昨日亡くなりました」

僕は目の前の女性は何を言っているのか理解ができなかった。いやしたくなかった。

それから女性は彼女のことを話してくれた。余命が一年と申告された病にかかっていたと。

延命治療をすればまだ数年は生きられたかもしれないが、彼女はそれを望まなかった。それよりも自分らしく、自分のしたいことをして何かを残すことを望んでいたのだと。

それから女性は僕に一通の便箋とCDを渡してくれた。僕は便箋とCDを受け取り、ふうと短く息を吐き、便箋を開けた。

「まずはごめんなさい。もしかしたらこれはあなたの手に届かず、読んでくれないかもしれませんが。それはそうだと思います。だって毎日歌っていますと言って突然いなくなってしまったのだから。だけどまだアップルジュースを持ってきてくれていると嬉しいな。でもそれは私のワガママだね。だからあなたに読んでもらってないと思つて書きます。もう一回ごめんなさい。私、長く生きられないと知っていたんです。でも嬉しくて、嘘をついてしまったんです。あなたが来てくれたことがとても嬉しかった。もう会えなくなるけど良かったら私の曲達をもらってください。ほんとにありがとう。名前も知らない君が好きでした」

最後の文字は滲んでいた。なんだよそれ。勝手だよ。違つか、勝手なのは僕か。僕が立ち止まらなきゃ彼女は治療を受けていて、まだ生きていたかもしれないんだ。

僕は知らない内に涙がこぼれていた。それも大粒の涙が。顔を上げるとそこにいたはずの彼女の母親はすでにいなかった。

だけどそんなことはどうでもいい。ただ涙がとまらなかった。

CDをセットして僕が一番好きな曲を流した。イヤホンから聴こえる彼女の声。

『君は僕で いつでも一緒だから 自分らしさを信じて』
伝えられなかった思い。伝えなかった思い。

便箋に彼女の文字ではない文字で、住所が書かれていた。
後日訪ねるとそこは彼女の家だった。

僕に手紙とCDを渡してくれた女性が迎えてくれた。

家に上がると仏壇にはいつも君が見せてくれていた笑顔の写真があった。

僕は帰り道に楽器屋に行きアコースティックギターを買った。彼女のように上手くは弾けないけど、彼女の歌を彼女と一緒にあの場所で歌っていいこう。

あれから一年立つけどやっぱり誰も立ち止まってくれない。

傍らにはアップルジュース。でも彼女と一緒にならそれもいいか。

そんな時「その曲、いい歌ですね」

「はい。僕の大好きな人が作った曲なんです」

彼女とあった一年後の今日、初めて人が立ち止まってくれた。

風が吹いて君の曲が流れていく、そんな予感がする晴れた大空が印象的な日だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5805m/>

アップルジュース

2011年10月7日15時30分発行